

丸山思想史学と中国近代思想の省察

區 建英

第一二回丸山眞男文庫記念講演会は、新潟国際情報大学教授、區建英先生をお招きして、二〇一〇年一月五日に東京女子大学で開催された。このご講演記録は、東京大学出版会編集部に作成いただき、區建英先生ご自身の加筆・訂正を経たものである。その概要は、すでに東京大学出版会発行の『UP』二〇一一年四月号に、「丸山眞男と私の中国研究」と題して掲載されている。本研究センター報告では、ご講演全体の記録を掲載させていただいた。ただし、ご講演の際に用いられた豊富な画像資料は、紙幅の関係から割愛させていただいた。

區建英先生に感謝申し上げますとともに、東京大学出版会編集部に厚く御礼申し上げます。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 大角 翠

ご紹介いただきました新潟国際情報大学の區建英です。東京女子大学丸山眞男文庫ならびに比較思想研究センターから、講演の機会を与えていただきまして、大変光栄に存じます。本日は「丸山思想史学と

中国近代思想の省察」というテーマで講演しますが、主に、丸山先生との交流と、丸山先生の学恩を受けた私の研究について話したいと思います。

一 丸山先生との出会い

1 思想史への関心と唯物史観の脱却

そもそも研究者として私の出発点は、自身の時代体験にあります。私は新中国に生まれましたが、近代百年中国が受けた帝国主義列強の侵略と戦乱の歴史について、悲哀な感情を潜めてきました。また、少女時代から文化大革命の動乱を十年間も経験してきて、いっそう悲しく感じたのは、新中国が独立解放を勝ち取って間もなく再び暗愚な状態に陥ったことです。そこで、なぜ中国人はいくら奮闘しても真の光明を迎えることができないのか、という疑問が生じました。先祖

からは、歴史を読むことによって賢明になるという教えが伝わってき
ていきますので、私は歴史研究によって解答を求めたかったです。ま
た、隣国の日本が近代において中国と同じ運命に遭わされましたが、
違う歴史を歩んできたことで、私は日本近代史にも強い関心を持つて
いました。

大学生時代には、まず日本人先生について様々な日本の文献を読み
ました。その中で、私の研究に決定的な影響を与える著作に出会いま
した。丸山眞男先生の『日本の思想』（岩波新書、一九六一年）です。
非常に新鮮な魅力を感じました。この作品は、日本の思想を歴史（異
文化接触の歴史）において全体的に捉え、その中で執拗に繰り返され
てきた外来思想受容のパターンを抉り出し、それを治療の対象として
解剖し分析し、よってその「病理」の構造的な原因を解明し、同時に、
日本思想自身の中から希望に向かう可能性を見出そうとするような立
派な研究です。そこに現れている叡智は、中国の歴史的省察にとって
も貴重な知だと、深く感銘を受けました。これがきっかけで、私は思
想史に強い関心を持つようになりました。

北京師範大学の大学院生の時から、私は日本近代の代表的な思想
家・福沢諭吉を研究するよう決めました。しかし方法論ではとても悩
みました。一九八〇年代半ば、改革開放に入ってから間もなかった頃、史
学は依然としてイデオロギー的な歴史観に縛られていました。具体的
には唯物史観の土台論でした。それに基づきますと、すべての歴史は
予め、経済的・生活の生産様式と生産関係という土台によって規定され

てしまい、思想的・政治的なものも結局、物質的基盤にしたがって展
開された必然的な結果です。これでは、人間が主体的に思考し思索す
る意味もなくなります。また、異文化接触の重大な意味を検討する余
地もなくなります。そうすると、人間の主体的な思考を探りたい、西
洋文明受容のあり方を検討したい、という私の模索は行き詰まります。

そして、丸山先生の思想的叡智を学び、思想の歴史的省察を行う
ために、私は唯物史観の束縛から脱け出ようと試みました。当時の知
的環境の中で、唯物史観の脱却は思ったより難しかったです。結局、
本格的な脱却を経験したのは、東京大学の院生時代です。しかも、脱
却するのは唯物史観だけではありません。丸山先生の思想史学からの
啓発によって、私はイデオロギー的な歴史観それ自体の脱却に目覚め
ました。これは、その後の私の研究に決定的な影響を与えたのです。

2 私の研究および中国の研究者への影響

日本に留学して、丸山眞男先生本人と出会う機会に恵まれました。
一九八七年、東京大学博士課程に入って間もなくの頃、安東仁兵衛さ
んが私の福沢諭吉に関する修士論文を丸山先生に渡したところ、丸山
先生は、この留学生に会うとおっしゃったそうです。そして、安東さ
んの手配によって、吉祥寺の喫茶店で、丸山先生に初めてお目にかか
りました。福沢諭吉研究や日中の近代思想について話し合った後、丸
山先生は、「私は區さんの個人指導教官になる」とおっしゃいました。
予想外の幸いに私はとても感激でした。丸山先生から直接ご指導を頂

けることを、大変幸運に思っていました。その後、丸山先生とは数人と一緒に会合したり、私が一人で先生に会ってご教示を頂いたり、また先生との電話や文通の交流もしました。さらに在日中国人留学生との交流にも広がっていきました。丸山先生からの個人的な指導については、私の研究に関する後の話題に回しますが、まず現代中国の動きと関連しながら、丸山先生と中国人研究者との交流について話したいです。

一九八八年は、中国国内で民主化の気運が高まっていた年です。そのとき、来日している中国人の留学生や学者の多くは、隣国日本の近代化に高い関心を持ち、日本を研究して中国の改革の道を探ろうとしました。このような志を持つ中国人たちは国際文化会館の支援の下で、社会科学研究会を作りました。一九八八年頃、私は研究会のコーディネーターを勤めていました。こういうグループの存在を丸山先生に伝えたところ、安東仁兵衛さんは、中国人研究者との対談を丸山先生に提案し、丸山先生は快く承諾しました。

丸山先生のご健康と対談の効果を考えて、出席者を二十名程度に絞り、この対談に関心ある留学生や研究者から、希望のテーマを募集しました。集計の結果、「儒教文化圏」の近代化への関心が最も多いというところで、「東アジア諸国の近代化をめぐる諸問題」をテーマにしました。そして対談は十月五日に国際文化会館で開催されました。みんなは、高い関心をもって熱心に丸山先生のお話を聞き、はじめに質問をしました。会の後、さらに先生と一緒に食事をしながら討論を続けま

した。みんなは深い感銘を受けました。対談の内容は『丸山眞男話文集（4）』（みすず書房、二〇〇九年）に収められていますので、ここでは、詳しく紹介しないことにします。

丸山先生との交流の中で、とくに中国の民主化をめぐる交流は、私の心に深く刻むものでした。一九八九年春、中国には民主化の気運が高まり、学生や市民が天安門広場で民主化を求める運動を行いました。私はこの動きを喜びと感動で迎えました。同時に、やはり文化大革命時の独裁と残酷な弾圧についての記憶が残っていますので、深い憂慮も抱きました。再度の流血と破壊への憂慮から、五四運動記念日前にして、私は「中国の「民主化」問題小考」という原稿を書きました。当時の状況の中でこの原稿を公表する自信がないまま、丸山先生にお送りしました。まもなくご返事（『丸山眞男書簡集（4）』所収、みすず書房、二〇〇四年）を頂き、添削入れの原稿をも同封されました。その後、先生のご提案で、この原稿は『現代の理論』に掲載されました。私の考え方をとても大切にしてくださいました。

天安門前の学生運動について喜憂半々の気持ちだった私に対して、丸山先生は喜びと感動の方が大きかったです。それだけに、六・四の弾圧事件が発生した時、丸山先生は深く心を痛めました。その頃、先生は学生・市民の非暴力の民主化運動について、毎日中国関係のテレビや新聞に気が取られたという有様で、また、その後の武力弾圧に大変ショックを受けました。中国の学生運動に対する丸山先生の深い愛惜、そして武力弾圧に対する憤怒が、その感動といらだちに表れてい

ました。六・四事件後、私は中国の民主化運動のこうした挫折を悲しく思っている中で、六月二〇日、丸山先生のお手紙が届きました。そのお手紙で先生は、中国の学生と市民の長く持続した非暴力抵抗運動に感慨を表し、日本の自由民権運動と関連して、中国の五四運動の思想的価値を論じました（『丸山眞男書簡集（4）』所収）。

六・四の天安門事件後、私たちが在日中国人留学生は重苦しい雰囲気の中で何か打開の道を探ろうと様々な活動をはじめました。丸山先生も悲憤と焦燥の中にいる中国の若者たちを気にかけてられ、六月二六日に吉祥寺でささやかな会合を設けてくださいました。それは、天安門広場で殺された学生と市民への黙祷から始まり、改革や革命の問題を学問や思想の高度から論じられる会合でした。思想としては、とても現在の切実感が迫ってきますし、また現実的対応としては、高いレベルの思想を実践の基礎にすべきだということを教えてくださいました。この会合の記録も、『丸山眞男語文集（4）』に収められています。

一九八九年の民主化運動をめぐる丸山先生との交流を経て、私はその時、先生の思想史学を中国人に紹介したいと考えました。まず思い付いたのは、先生の福沢論吉研究です。様々な雑誌や著書に掲載されている先生の福沢研究論文を集めて、丸山先生と一緒に一冊を編集し、そして中国語に翻訳しました。その頃の私は、力が湧いてきたように、いつもノートパソコンを抱えて翻訳に夢中でした。当時の中国語ソフトは立ち遅れていました。入力したデータは何回も消されましたが、訳文を懸命に記憶して何回も入力し直しました。訳著の出版に至るま

で、先生からは病中ながらも序言や補注を書いていただき（「序」『福澤論吉の哲学他六篇』所収、岩波文庫、二〇〇一年）、多くのご助言を頂きました。私もこの翻訳を通じて、先生の福沢論の価値に対する理解を深めました。

3 中国への影響拡大

丸山先生 の思想史学に対して、中国の研究者からはどういふ反響があったでしょうか。『福澤論吉と日本の近代化』という訳著が、丸山思想史学に対する正面からの反響を呼んだ最初のきっかけだと言えるでしょう。一九九二年上海・学林出版社から刊行された直後、編集者はこの訳著の内容に新鮮さを感じ、とても感銘を受けたと言ひ、丸山先生に一筆を書くよう求めました。先生はその要望に応じて、色紙に「独立自尊迎新世紀」を書いてくださいました。その後、雑誌『読書』の有志者からは、この訳著がなかなか入手できないので、十冊送ってほしいという要望がありました。また、個人的に私に訳著を求めたり、私と討論したりする人も多かったです。その後、過去に私を教えたいた北京の先生たちは、この訳著を大学生も入手しやすいようにするために、世界知識出版社に頼んで、それをペーパーバックにして一九九七年に再版し、北京大学の書店にたくさん置くようにしました。

訳著の内容について反応は様々です。一部の研究者は近代化の視点から、丸山先生の福沢論を高く評価し、大学院生の日本研究指導に取り入れており、研究指導の面で私と交流したいという要望もあります。

他方では、「脱亜論」への視線が厳しいためか、福沢への関心よりは、丸山先生本人に関心が寄せられています。北京大学の院生と語り合う時には、この点を感じました。しかし、丸山思想史学において福沢研究が非常に重要です。「天は人の上に人を造らず」「独立自尊」などを唱えた福沢の思想は決して陳腐になっていません。人間の主体的な思考の樹立からも、異文化受容の観点からも福沢研究に重大な意味があります。だから、丸山先生が解明した福沢思想の価値が中国人に十分に理解されていないのは、残念に思います。でも、多くの中国人が丸山先生に関心を寄せるようになったのは、良いことです。

二冊目の訳著は『日本の思想』（三聯書店、二〇〇九年）です。『日本の思想』は私に最初で最大の影響を与えた丸山先生の著作ですが、この著作を大切にしているだけに、私はなかなか翻訳を決意できませんでした。間違った理解が広がるのを恐れるからです。今回の翻訳・出版は、平石直昭先生のご提案とご助力によって達成されたのです。正確に言えば、数人の中国人民大学院生が指導教員・劉岳兵先生の発案によって翻訳した草稿が先にあつて、それを大切にする平石先生は私に相談し、私が改訳を行ったものです。院生の訳稿を改訳するのに苦勞しましたが、私も平石先生と同じ気持ちでそれを大切にしたいし、間違った理解の広がり避けるために自分も頑張るべきだと思つて引き受けました。改訳する時、平石先生から多くのご助力を頂けたことにとっても感謝します。この訳著は二〇〇九年五月刊行され、七月頃には、もうベストセラーとなりました。

近年、私は時々、中国の大学や学会で講演したり研究発表をしたりしています。その場でも、何らかの形で丸山先生の思想史研究を伝えていきます。大学での講演では、学生たちがとても興味を持ってくれます。学会では、とくに二〇〇七年福建での学術シンポジウムにおいて、丸山先生の観点や方法を活用している私の嚴復研究論文が注目されて、基調報告を担当するようになりました。近年、私の講義を繰り返して求めているのは北京大学です。大学院生を対象として、日本近代思想史とくに丸山先生の研究について集中講義をしてほしいと、数年前からその要望があり、毎年その要望が来ています。しかし今でも実現していません。向こうの教員からは、「私を定年退職まで待たせるのか」と言われました。それほど先方の関心が高いです。まだ実現していない理由は、十五回の授業に当たる集中講義なのでとても責任を感じており、慎重に準備しなければと考えているのですが、小さい大学に勤めており、想像以上に本務校の雑務が多くて、準備する時間がなかなか取れないのです。とても心苦しいです。できるだけ早く実現したいと思います。

丸山先生の思想史に対する中国人の反響は、雑誌やインターネットにも現れています。様々な角度から丸山の学説が論じられている中で、東アジア地域の儒学伝統の異同と近代化や民主化の問題、それから思想史の方法論に多くの関心が寄せられています。とくに中国・日本・韓国における儒学の共通点と相違点や、それぞれの伝統と近代化との関わり方についての議論が多いです。全体の印象としては、若い

人たちは、中国の従来の研究パターンに飽きており、丸山先生の考え方に新鮮さを感じ、何かを求めているようです。関心は次第に高まっていると言えるでしょう。ただし、それらの説には、一、二の新鮮な概念を敷衍して自分の議論を展開しているという感じのものもあり、必ずしも丸山先生の学問をしっかり理解しているとは言えません。しかし、これは自然なことです。日本人にとっても、丸山先生への理解は容易なことではないでしょうね。

二 丸山思想史学と方法への自覚

本日は「丸山思想史学と中国近代思想の省察」というテーマを出していますが、丸山の思想史学にしても、中国近代思想にしても膨大な学問ですから、ここで両者の関連を全面的に語るのは無理です。私は中国近代思想の省察の一部として、厳復という思想家を研究してきましたので、ここでは、私の厳復研究から、いくつかの論点を取り上げて説明したいです。

厳復は中国の近代思想家の一人です。一八五四年福州に生まれ、一八六七年福州船政学堂に入学し、西洋科学の学習を経験しました。一八七七年イギリスに留学し、西洋の社会・政治にも関心を寄せました。一八七九年帰国、福州船政学堂の教職を経て、北洋水師学堂の教務長・学長を歴任しました。日清戦争後、維新变法運動で新聞の創刊、学校

の創立などの啓蒙活動に携わり、また、多くの西洋思想家の名著を翻訳し、教育と著述に尽力し、中華民国初期、北京大学の学長を勤めました。厳復が果たした役割を言えば、近代日本における福沢諭吉の役割と類似したもので、その接点は、近代の変革期における西洋文明の導入にあります。

1 イデオロギー的歴史観の脱却と思想史の方法

さきほど申し上げたように、私は最初に、丸山先生の思想史学から啓発を受けて、唯物史観を脱却するよう試みましたが、認識を深めるにつれて、さらに、唯物史観を脱却することだけではなく、イデオロギー的な歴史学それ自体を脱却する必要性を自覚しました。つまり、唯物史観に限らず、特定の一元的なイデオロギーの価値基準に基づいた歴史理解を脱却すること、これが重要だという自覚です。というのは、特定のイデオロギー的価値基準に基づいて歴史を理解しますと、多角的に歴史を見る広い視野を失い、豊かな要素に満ちた歴史諸相の様々な解釈の可能性を、閉じてしまう恐れがあり、この点では、唯物史観以外のイデオロギー的な歴史観も共通しているからです。

たとえば、中国のイデオロギー的な歴史学といっても、時代によって変わるものです。中国の「現代化」の進展につれてイデオロギーが変化していきます。唯物史観に代わって、民族主義が歴史観を支配するようになり、また、人民主義に代わって、権威主義も史学に浸透していきます。近年、民族主義をイデオロギーとして近代史を解釈する傾向

が流行っています。要するに、近代の改革者は民族主義者であるに決まっているという考え方の下で、民族主義の主流をはずれた厳復や胡適のようなりべラリストも、中国一般の民族主義者と曲解されてしまっています。例えば、厳復は二〇世紀初の「文明的な排外」を明確に批判しましたが、「文明的な排外」の擁護者として解釈されます。あるいは逆に、厳復に民族主義が欠けているということが問題とされ、近代革命の潮流に反する間違った思想として批判されます。問題は、厳復が民族主義者か否かの確認ではなく、ナショナリズムの主流をはずれた厳復の思想の価値が見失われてしまうところにあります。つまり、近代中国の民族主義のあり方に疑問を持ち、リベラリストとして主体的に考え、個人の自律と自由を唱えた厳復の思想に対して、その価値を解釈する可能性が閉ざされることです。

この史学の体験の中で、私はイデオロギー史観を断ち切る必要性を切実に感じました。では、どのように研究の方法を措定すれば、中国近代思想に対する省察ができるのか、悩んでいました。この面で、丸山先生から頂いた最大の学恩は、思想史学の方法論です。それは予め何か特定の価値基準があつて、それに従わなければならないのではなく、実践の課題に向き合う研究者の主體的な関心から、歴史上の人々の思考や思索を考察するものです。

その思想史学はまず、一般の歴史学と共通するところがあり、歴史的考証によって制約され、歴史的な文脈の中で説明しなければなりません。しかし、思想史料や史実の解明に止まらず、思想の問題を分析

しあるいは思想の価値を発見する、という点では、一般の歴史学と異なります。丸山先生は、思想史研究者の仕事音楽演奏家の再現芸術に譬えます。それは、演奏しようとする楽譜に基本的に制約され、楽譜の解釈を通じてその作曲家の魂を再現するものです。しかし、単に楽譜を機械的に演奏に反映させるのも、再現芸術ではありません。演奏が芸術的であるためには、必然的に自分の責任による創造という契機を含みます。それは自分で勝手に創造するわけではありませんが、作曲家の第一次的な創造に対する追創造だということです（『思想史の考え方について——類型・範囲・対象』『丸山眞男集』第九巻、岩波書店、一九九六年）。

再現芸術としての思想史という丸山先生の方法論から啓発を受けて、私は研究の姿勢を定立することができました。何かのイデオロギーを準拠とするのではなく、史実に忠実に解明することを前提に、われわれが生きている現実への問題関心から、主體的に方法を独創し、思想像を構築するという姿勢を採りました。私の厳復研究には、過去の思想が持っている多様な可能性を再現するという心構えで、できるだけ歴史的な文脈に内在し、史料の調査と解説に力を入れました。むしろ、私の目的は、厳復の思想は何であつたかという結論を求めるといふよりも、近代中国の苦悩を抱えた厳復という個人は、歴史の中で何を思索していたのか、また、その思想を今日われわれが思索し続ける意味は何か、ということの解明にあります。

2 自己批判と可能性探究の思想史

私が試みた中国近代思想の省察はまず、『自由と国民 厳復の模索』（東京大学出版会、二〇〇九年）という著書に結実しました。この著書は丸山研究ではなく福沢研究でもありませんが、多くの問題分析に丸山先生の叡智を活用させていただいています。

丸山先生の叡智の一つは、「日本の自己認識としての思想史学」です。その中に、自己批判と可能性探索という二つの課題が実践されています。私が最初に出会った『日本の思想』という著作は、異文化接触の歴史の中で執拗に繰り返されてきた日本思想のあり方、異文化受容のパターンを抉り出して分析し、思想の構造的な問題を説明しました。その延長線で、丸山先生はまた分析概念として、「原型」、その後は「古層」、さらに「執拗低音」、というような概念を独創し、日本思想の外來思想受容の仕組みを構造的に捉えました。自己批判の思想史として、これは根っこからの解剖と分析です。また同時に、その中から、「将来に向かっでの可能性」を見出そうとする方法です。

中国思想のダイナミズムの仕組み（主旋律と契機）はもちろん日本と違ってきます。しかし、根っこから分析しますと、やはり「古層」や「執拗低音」のようなものがあります。それは、何らかの具体的な思想ではなく、思想の歴史的発展における古今の継起の仕方や、異文化受容における諸要素の構成の仕方、という位相に関わるものです。むしろ、中国の膨大な思想史を歴史的に全体的に捉えるのは、今の私の能力を超えることです。だから、私は厳復を取り上げ、彼の伝統と

の対決を通して中国思想の「執拗低音」を掴みかけたのです。同時に、近代中国のナショナリズムの主流をはずれた厳復の思想のあり方から、未元の問題としてもう一つの可能性を探りたかったのです。丸山先生は日本近代化の代表的な思想家・福沢に可能性を見ましたが、私は近代中国における非主流の思想家・厳復に可能性を探るのですね。ここでは、中国思想史の「執拗低音」に関する分析事例の一つとして、中国の伝統における「仁政」の位相を別扱した厳復の思索を取り上げて説明します。

3 「仁政」の位相——伝統的構造の解体と再構築

① 中国の専制と伝統習俗

ここで、「仁政」のことを取り上げたのは、「仁政」の思想が中国の政治思想において、最高の価値を持っているからです。それは「民のため」を政治の目的とする民本思想として、普遍的価値を持っており、歴史上、暴虐な政治と対決する根本的原理としても働いてきました。また、近代の改革者もこれを積極的に継承しようとしてきました。近代でも、「仁政」の価値を否定しようとするものはいません。ただし「仁政」は、中国の政治思想の中で、単独の存在ではなく、周りの他の文化要素と一定の位相を構成しています。その位相のあり方によって、「仁政」の働く機能が非常に影響されます。実際、「仁政」は中国の専制の持続を支える役割も果たし続けてきました。これゆえ、社会変革に際して、外来文化を受容しながら「仁政」思想を継承する

時、伝統文化における「仁政」の位相を無視してはなりません。ところが、この点がいつも見落とされています。そして、「仁政」と専制との独特な結合構造が執拗に繰り返されてきました。嚴復は、この問題を見抜いた希な思想家です。彼は、モンテスキュー『法の精神』をはじめ、西洋思想と比較する視点によって、中国の専制の本質と「仁政」との関連を解明しました。

モンテスキューは、国家統治権の形態として政体を説明する時、専制政体は恐怖を原理とする（民主政体は徳を原理とし、君主政体は榮譽を原理とする）、という理念型を語りましたが、同時にまた、中国を専制の原型とし、中国の統治を家父長的な政治として描きました。それによると、中国の立法者は帝国の安寧を統治の主要目的とし、人民を従属させることを統治の最も有効な手段とします。父祖を尊崇する観念を鼓吹し、無数の礼法や儀式を決めて人民の日常生活に浸透させました。この帝国は家族的統治という観念の上に形成されています。この分析こそ、嚴復に重要な視点を与えました。つまり、嚴復から見れば、中国の専制は恐怖もありますが、「恐怖を原理とする」というより、家族的統治―宗法（家族的統治を称する嚴復の用語）を原理とする「礼教」に、「仁政」思想が働いていますから、久しく持続してきたのです。

モンテスキューの示した専制政体の理念型は「変化と進歩の原理」を持っておらず、しかも風土や地理などの要素を決定要因として中国の専制を説明する傾向があります。そこには、永遠に専制が抜き捨て

られない中国の宿命への示唆が含まれました。その絶望的な宿命から中国を救出し、中国人自身の希望を打ち立てるために、嚴復は、社会進化的な進歩の観念を導入して問題を分析し、とくに人為的な要因としての伝統習俗に着目し、中国の専制とその長期持続の要因を考えました。彼が注目した伝統習俗とはほかでもなく、宗法的統治の「礼教」原理と「仁政」思想との結合です。

② 「仁政」思想の悲運

中国の「仁政」思想は、嚴復の言葉で言えば、「家族的統治によってその国を治める」（宗法社会）という時代に生まれ、発展してきました。そして「仁政」は、宗法的な体系においてしか機能を発揮することができませんでした。これがまさに「仁政」思想の悲運です。

そもそも「仁政」は、統治者が思いやりをもって親切に民を扱い、恩恵を施し、民心を獲得しよう主張する思想です。「民のため」の政治を唱え、民本思想が貫いており、統治者に対する道徳的な制約を果たす原理として働いてきました。しかし他方、仁政の思想は、礼教と不可分な関係を持っていました。というのも、当時は宗法社会であり、宗法的な結合を中心としていました。したがって、暴政に対する仁政の制約は、現実社会の宗法的原理を生かす方法を探るのが有効だという考え方がありました。聖人は擬制血縁的な人間関係による社会の結合を想定し、家族関係の慈愛と孝を政治に運用して、統治者と被治者を親と子供との関係に擬え、その親和を図ろうとしました。そして理

論的には、統治者と被治者を厳格な上下関係に定めて社会の秩序を維持しながら、統治者が民をわが子のように慈しみ、民は父母を敬うのと同じように、統治者に孝行し奉仕する、ということが説かれたわけです。

こうして、家族的原理が政治統治の原理として押し広げられ、「仁政」の動機には、家族的な温情と慈愛が浸透してきました。漢の時代からは、宗法的な専制の発達につれて、「君主は民の父母になる」とか、「父母官」というような言葉も生まれて、「仁政」を象徴する政治的な言説として次第に定着しました。「父母官」とは、官吏が自分を民の父母とし、民を自分の子供とし、親がわが子を愛するように民を愛し民に親しむ、ということを評価する言葉です。こうして、慈愛の情を帯びた家族的原理が「仁政」の理念に組み込まれ、有徳者の統治が経世の大綱として定められました。このように宗法的な礼教と「仁政」とが緊密に結合したからこそ、中国の専制がその強さを保って延々と持続してきたのです。

しかし実際に、家族的（宗法）原理が政治統治の原理として押し広げられた場合、必ずしも民を愛し民に親しむとは限らないのです。子に対する親の絶対的な権力もあり、子に課した絶対的な親孝行も伴っています。子供としての民は、親としての統治者に対する尊敬と服従と奉仕を背負わなければなりません。しかも、親子としての官民間係には、たとえ統治者からの慈しみがあるとしても、民の自主性や独立の人格を樹立する正当性はほとんど得られません。まず、人民は具体

的に誰かの子ではなく、総体として統治者の子供であるため、独立した個人としては認められません。また、親である統治者は子供を教える教師でもあるため、一人ひとりの人民が認識の主体や理性的判断の主体としては認められません。まして統治者が暴虐になる場合はなおさらです。中国の歴史上、「仁政」という看板の下で多くの暴政も発生しました。

そもそも「仁政」は民を本位とする思想ですが、宗法的原理と結びつけられた中で、親としての官吏が本位に逆転しました。実際上の官本位という倒錯現象になったわけですから、中国の伝統習俗における「仁政」の位相です。この仕組みの中で、子供としての民は自主性がなく、自分の運命を守ることさえできませんから、「父母官」を期待し続け、「父母官」に頼ろうとする傾向も生じました。というのも、仁愛の虚偽性とその仕組みに隠されているからです。その実態を厳復が暴露しました。官は「仁であれば、民にとって父母のようになり、暴虐であれば、狼になる」（『法意』案語、商務印書館、一九八一年）と彼は指摘しました。林語堂も『吾国と吾民』という著作の中で、厳復と類似した観点から「仁政」「父母官」の虚偽性を暴露したことがあります。まさに「仁政」が宗法と結びつけられたからこそ、中国の専制の延命に有効な役割を果たしました。

このような「仁政」の伝統的な位相が中国の歴史で執拗に存続しています。中国の歴史上、何度も農民運動が起こって暴虐な君主を倒し、新しい有徳者を皇帝に推戴しましたが、「仁政」の仕組みがそのまま繰

り返されてきました。また、近代的な改革においても、それが依然として執拗に繰り返されてきました。

厳復は、同時代の中国知識人にこの現象を実際に見ました。近代の改革者の中には、「仁政」思想を近代的に生かす考え方が多かったのです。それは間違いではありませんが、肝心の問題は、伝統的な位相を無視したままに「仁政」思想を民権思想と接合するという傾向にあります。例えば、孫文は王道の民本思想を単純に民権主義へ転用しました。孫文から見れば、「堯舜の世はすでに共和政体を為していた」（中国は内閣制度を適宜とする）『孫中山文集』上、団結出版社、一九九七年）。「二千数百年前の孔子、孟子はすでに民権を主張した」、「天下を公と為す」という孔子の説は「民権の大同世界の主張だ」、「堯舜の政治は名目上で君権を用いたが、実質的には民権を行つた」（『三民主義』同書）。孫文は、堯・舜・禹・湯から孔子・孟子へと継がれてきた中国の道統が自分の思想的基礎だと言い、自分の推進する革命はこの道統を継承・発揚することだと言いました（『中国現代政治思想史資料選輯』上冊）。当時、清朝打倒という民族主義の背景において、彼が指導する革命の旨は、満州族の専制を倒して漢族の有徳者で父母官のような統治者を立てることでした。

実際、辛亥革命を経て孫文が中華民國の臨時大統領になった時、南京の民衆は、孫という名字の新しい皇帝が現れたと互いに伝えて喜びました。他方、かつて子供の立場だった人民は一旦、中華民國の議員や官吏になると、自分を「父母官」と称し始めました。国会議員も旧

来の官吏と同じように、子供としての人民に対し自分への親孝行を求めます。中華民國政府の腐敗は清朝よりも酷かったと言われています。これらの現象の背後には、民の父母と自称する統治者と、「父母官」の慈しみを期待する人民、という官民関係の精神構造が連続しています。今日の中国においても、「父母官」による仁政と教化の考え方が依然として通用しています。例えば、上海などの先進的の地域を含めて、町や村など社会末端での民主選挙には、「身近な父母官を正しく選ぶ」というようなスローガンも見られます。もし近代の革命や改革を中国歴史の新しいメロデーに譬えるならば、三民主義、社会主義、市場経済へと変わっていく各時代の主旋律に、「仁政」の伝統的な位相が「執拗低音」のように深く沈着して響き続けていると言えるでしょう。

③ 「仁政」価値の救出と異文化受容

「仁政」思想は長い歴史において宗法的な専制に組み込まれ、その普遍的価値が歪められていたため、それを単純に近代の民主思想に転用してはなりません。「仁政」の普遍的価値を新しい政治理念の構築に生かすために、厳復は専制の宗法的性格を民本思想から取り除かなければならなかったのです。その知的作業は、「仁政」の伝統的な位相に対する構造の解体でした。

厳復は「仁政」に飾られた専制の実態を次のように指摘しました。「中国秦以来の社会は、天下とも国とも言えず、皆家に過ぎない。一姓が興れば、億兆の民がその臣妾となる」（『法意』案語）。彼から見れば

ば、国家の統治に家族原理を適用した社会では、家族のような温情が唱えられても、結局は、君主の一家が天下のすべてを私物化してしまいい、億兆の民は皆その家の妾や子供ないし奴隷です。この政治習俗において、真の民本や仁政を実現するのは困難です。

この伝統的位相の中で、最も「仁政」の価値に反しているのは、人民の自立と発展を妨げ、人民の権利を無化するところにあります。厳復は、西洋の君主との比較によって、その問題点を指摘し、「西洋諸国の王者はもっぱら君主になるのみである。これに対し、中国の帝王は、君主になるのみでなく、師にもなる。この社会はもとより宗法社会である故に、また、天子が民の父母になると言う。……結局、君主の責任は尽きることがないため、民の為すべきことも発達する道がなくなる。君が仁であれば、民をわが子と視るが、君が暴であれば、民を奴虜として扱う。わが子と奴虜とは違うが、この国において政治権利を少しも有しておらず、有すべきであって奪われてはならない権利を全く持っていない点では同じである」『社会通詮』案語、商務印書館、一九八一年」と述べました。

モンテスキューは希に、中国の君主が災害時に貢租を免除して恩恵を示すことも語りましたが、この点について、厳復は次のように分析します。「西方の君と民は真の君と民であり、君も民も皆権利を有する者である。東方の君と民は、世が良い時は父と子であり、世が悪い時は主と奴であり、君は権利を有し民はこれを有しない。共に権利を有する場合、双方の勢いが相伯仲して争うことができる。……東方で

は、君は至尊で相對峙する者がない地位におり、民の苦楽生殺を尽く握っているため、民を救済しなければ、民が自らを救済できないから、貢租免除の詔令を与える」『法意』案語。

ここで厳復は、君主の仁愛か否かという道德論を、権利の有無の問題に切り替えて、民が権利を有しない宗法的な君民関係のあり方を別決し、民の自主性の喪失をもたらした問題を暴露しました。彼から見れば、政治が宗法的な原理で動かされている限り、子としての民は自分の主体性を樹立することができません。したがって、「仁政」はあくまで、父母としての君主や官吏の恩徳として授けられますし、民の正義の伸張も「父母官」に頼るしかありません。いうまでもなく、この状況において、人民の社会的関心、社会の主人公になるような公共精神も生まれにくいのです。これゆえ、厳復は、「仁政」と宗法とが結合しているという伝統的構造を解体させ、権利思想の導入によって「仁政」の価値の基礎を再構築しようとした。

この解体と再構築は、容易な知的作業ではありませんでした。現に同時代人の中で、西洋文明の導入と伝統文化の継承を主張する時、「仁政」と宗法的な専制とが一体に結びつけられているという位相を無視したままに、西洋の概念と接合する傾向があります。そこで、一番多く発生したのは、民本思想と民権思想との混同です。そうした概念の混同や異文化の安易な接合という問題に対処するために、厳復は、中国と西洋の政治習俗の相違を力説するよう努めました。たとえば、次のように指摘しています。「中国と西洋は、政治を言う時の根本が大

いに違ふ。西洋で言う政治は、主権がもともと民に属し、政府が権柄を取るのは民から与えられたのであり、……中国で言う政治は、寸権尺柄が皆官に属し、その行政は官の固有のものである。……私がひたすらに、中国と西洋の義理が大いに違ふと言っているのは、学者が従来の陳腐の義を援用して自己を欺くことを深く戒めるためである」

（『社公通証』案語）。

以上のように、嚴復は西洋思想との比較を通じて、中国の専制における宗法の問題と「仁政」の位相を抉り出し、その構造を解体して「仁政」の普遍的価値を救出しようと試みました。その上で、西洋の権利思想を中国の主流文化に参入させて、「仁政」の価値を再構築しようと思ひました。皮肉なことに、嚴復の思想的な試みは近代中国において、主流の思想になれなかつたのです。しかし私の狙いはまさに、主流の思想になれなかつた嚴復の試みを未完の課題として解明し、将来に向かつての可能性を見出すことです。

もとより、嚴復の試みが主流の思想になれなかつたこと、この現象それ自体も、中国思想史の「執拗低音」を物語っています。上述した「仁政」の伝統的位相とは別の、もう一つの、つまり異文化受容における「執拗低音」だと言えます。それは、外来文化を取り入れるか否かではなく、外来文化の要素をどのように組み合わせるか、その位相に問題があり、とくに中国の道統に関わる場合、外来文化が主流文化になりにくいですが、このような異文化受容の様式が働いているといふことです。

丸山先生の「執拗低音」の視点を通してこそ、「仁政」の位相に対する嚴復の解体と再構築の試みを洞見し、また、中国思想史に潜んでいふ異文化受容の様式を浮び上がらせることができました。「執拗低音」といふ視点が中国の伝統的な思想構造を病理的に解剖する有効な方法だと感じています。

本日の講演はこれぐらいにいたします。ご静聴ありがとうございました。

丸山思想史学と 中国近代思想の省察

講師： 區 建 英 氏

(新潟国際情報大学 情報文化学部教授)

日時：2010年11月5日(金) 15:00～16:30

会場：東京女子大学 24202教室

東京都杉並区善福寺2-6-1 (JR西荻窪駅北口より徒歩12分。バスの場合は西荻窪駅北口より吉祥寺駅行き東京女子大前下車)

申 込 不 要 ・ 入 場 無 料

【講師プロフィール】 區 建英 氏

新潟国際情報大学 情報文化学部 教授。専門は、日本と中国の近代思想史。
中国広州生まれ。北京師範大学修士課程終了後、暨南大学歴史学部専任講師を勤め、1986年来日。
東京大学大学院を経て博士学位を取得、現職に至る。丸山眞男から直接指導を受けた唯一の中国人学者。
日本近代思想特に福澤諭吉の研究を通して、中国近代思想の省察を行うという姿勢で、研究を進めてきた。
主要な研究業績は、『福澤諭吉と日本近代化』[丸山眞男著] (編集、訳、学林出版社、1992年)、『近代日本と東アジア』 (共著、筑摩書房、1995年)、『日本立憲政治の形成と変質』 (共著、鳥海靖ほか編、吉川弘文館、2005年)、『日本の思想』[丸山眞男著] (共訳、生活・読書・新知 三聯書店、2009年)、
『自由と国民 厳復の模索』(東京大学出版会、2009年) などがある。

参考資料：『福澤諭吉と日本の近代化』序 (丸山眞男『福澤諭吉の哲学他六篇』所収 岩波文庫 2001)
「順口溜」と漫画から見る中国の世相 (區建英『UP』東京大学出版会 2010年2月号)

【丸山眞男文庫とは】

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約二万冊の蔵書と約三万頁の手稿類が1998年に東京女子大学へ寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会等を開催しています。

【問合せ先】 東京女子大学 教育研究支援課 TEL 03-5382-6293

<http://www.twcu.ac.jp/>